

市民広聴会「まちづくりほっとミーティング」

テーマ：がんになったかたの想いを分かち合う

会議録（概要）

日時	令和5年7月9日（日） 13時30分～14時50分
会場	岡崎げんき館
出席者	参加者（公募）10人、市長

1. 市長あいさつ・趣旨説明

- ・今年度のまちづくりほっとミーティングは実際に不安や心配などを抱えているかたの声を直接聴き市政に反映していくことを目的に開催する。今回はがんになったかたやその家族などの想いを分かち合い、求める支援について話し合いたい。

2. 意見交換内容（参加者から出た意見）

【がん（病気）の教育、啓発について】

- ・「自分は元気だから大丈夫」と思っているかたが多い。心の準備ができていない状態で自分ががんだと知ると必要以上に慌てたり落ち込んでしまう。
- ・子どもの頃から病気の話聞き慣れておくことが大事。学校で行われている「命の授業」などを使って、子どもたちに実際に病気になった人の話を聞いてもらう機会をたくさん作るべき。そのためにはがん経験者が講師として自身の体験談を話す活動の場があっても良いと思う。
- ・がんの話が聞ける機会があっても、大人ですら大半は「私はがんにならない」と思っているから話を聞きに行くまでに至らない。子どもの頃から「がんは誰でもなる病気」であることを教わる環境があると、がんの話聞きに行くことへのハードルが下がると思う。

【がん検診の啓発について】

- ・若い人が「検診の大切さ」を感じる機会が少ない。どこかで「病気になるのは、年をとってから」と思っているかたが多いと思うので、中学・高校生への啓発は大事だと思う。
- ・30～40代でも、乳がんや子宮がん、子宮頸がんなどにかかっているかたはたくさんいる。例えば小学校のPTAの集まりなどの場で、同世代のがん経験者から「検診に行ったから早

く見つかった」とか「発見が遅かったらもっと大変な治療が必要だった」といった実際の声を聞くことで、自分のことのように受け止めることに繋がり検診の大切さが伝わるのではないか。

- ・がん検診はがんを早く見つけることの大切さを知ってもらうための検診でもあると思う。発見が遅いと身体的にも金銭的にも負担がかかってしまう。情報発信は徹底的にやるべき。
- ・検診と聞くと、内診への抵抗感や苦痛というイメージが先行してしまっている。マンモグラフィだけでなくエコーもある、痛みを伴わない方法もあることを知ってもらい、心理的苦痛を取り除くことで若い人でも行きやすくなると思う。
- ・子どもの頃から、こんな病気になることもある、こんなことが多い、なった時はこんな施設や相談場所がある、という情報提供があっても良い。自覚がないと自ら検診へ行くことは少ないと思う。
- ・学校や講演など様々な場面でがん経験者が発信することによって、一人でも多くの人が耳を傾け、検診を受けてみようという気持ちに進んでいくと思う。
- ・オンライン学習が普及し手軽に学習できる環境もあるので、子どもの頃から検診について目にする機会を設け、検診に行くことは特別じゃなくて普通のことだと認識させることが大事。

【当事者が思いを吐き出せる場について】

- ・当事者が邪魔されずに思いを吐き出せる場が必要。病気と向き合えるように、受け止めてもらえる場がたくさんあると良い。また、そういう場があることを知らせることも必要。
- ・がん患者同士がお互いに話すことで救われることがたくさんある。付き添われているご家族同士で話ができる場も大切。
- ・がんになってすごく不安なとき、同じ経験をされている方々と自然に話ができるのはとても安心できると思う。診察時には聞きにくいことも、患者サロンでは治療のことや今後の不安など、しっかりと話を聞いてくれて相談がしやすいと思う。当事者やその周りのかたにとって患者サロンは心強い施設だと思う。

【がん患者でも働くことができる支援や企業教育】

- ・子どもの学校関係での当番や役回りなどを子育てや仕事と両立するのは大変。例えば、そういうところをがん患者が働く場にするると双方にサポートし合えるのではないか。また、がん患者の中にもいろんなスキルを持っているかたがいると思うので、部活動の指導者としても能力が発揮できるかもしれない。

- ・病気になっても楽しく明るく生きていくことに繋げるために、就労に対する支援や企業に対する教育をしてほしい。

3. 市長総括

- ・こういったテーマだとオープンにして話し合えるだろうかと心配があったが、様々な意見をいただくことができ、新しい気づきがあったり納得させられる内容であった。市政の参考とさせていただきたい。